



Title	舞台表演におけるガウチョの表象とアルゼンチン・アイデンティティーの変化と持続
Author(s)	川端, 美都子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49434
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【47】	
氏 名	かわ ばた みつこ 川 端 美 都 子
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 2 6 2 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	舞台表演における gaucho の表象とアルゼンチン・アイデンティティー の変化と持続
論 文 審 査 委 員	（主査） 准教授 伊東 信宏 （副査） 教 授 根岸 一美 教 授 永田 靖 准教授 岡田 裕成

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、アルゼンチンの国民的象徴と受け止められて来た gaucho（大草原パンパの牧童）について、主に舞台におけるその表象を音楽的側面から歴史的に辿り、その変化が持つ意味を描き出そうとする試みである。時代的には 19 世紀末から、現代までを扱っている。全体は A 4 判 268 頁におよび、図や写真などが含まれているのはもとより、本論で論じられた音楽や踊りの分析のために不可欠な動画資料、および録音資料 13 件を含む DVD が添えられている。

まず序章で、上記のような目的を概観し、それぞれの論点についての先行研究を挙げて、本論文の独自性を確認する。その後、第 1 章は、まず現実の社会変化の中で gaucho がどのように変質したかを跡づける。第 1 節が扱うのは、時期的には内戦期（1820-1852 年）、近代国家形成期（1852-1880 年）だが、この期間に gaucho は近代社会の周辺へと追いやられてしまう。この後、国家的「伝統」として gaucho は「伝説化」「英雄化」され、再発見される。その過程を描いたのが第 1 章第 2 節であり、この運動は「gaucho の伝統」と呼ばれた。ここでガ

ウチョはまず文学において見いだされ、続いて音楽的な表現としても広まってゆく。

第2章は19世紀末から20世紀初頭の新国家形成期を扱うのだが、ここで論述の焦点となるのはクリオージョ・サーカスとよばれるアルゼンチン固有の大衆芸能である。ここで典型的なガウチョ像が舞台上に現れるとともに、ミロンガ、トリステといったガウチョ固有の音楽のレパートリーも確立された。本章では『ファン・モレイラ』のような代表的ガウチョ文学（後にサーカスで舞台化された）を分析するとともに、ガウチョ音楽のレパートリーについてリズムや旋律型の面から具体的に検討している。

このようなクリオージョ・サーカスの人気は、映画の登場などにより下火になるが、ここで提示されたガウチョ像は、その後もアルゼンチンの舞台に形を変えて生き残る。第3章はそのような民俗復興運動を描いている。ここでは、ガウチョ音楽は単なる地方音楽としてではなく、国民音楽へと読み替えられ（1930年代）、さらに大衆音楽へと変質してゆく（1960年代）。

第4章は現代のガウチョ表象を扱う。具体的には、いくつかの民俗音楽祭が取りあげられ、国際化の傾向を示すものもあれば、より土着化するものもある、という対照が示される。また2005年の舞台「エル・ナティーボ」におけるガウチョ像が、これまでのガウチョ像を超えて先住民系のイメージと音楽を取り入れ始めていることをグローバリズムの文脈の中に位置づけようとする。

そして終章で、全体を総括しつつ、さらにアルゼンチンのユダヤ的伝統にも触れながら、今後のアルゼンチンの国家アイデンティティーの行方について省察を行なっている。

論文審査の結果の要旨

著者は自らアルゼンチン音楽を演奏し、歌い、踊り、そして英語やスペイン語を通じて現地にも飛びこみ、果敢にインタビューやフィールドワークを行なっており、この論文を通じて、そのような著者の才能の豊かさが伝わってくる。ガウチョという一つの形象を通してではあるが、アルゼンチン音楽の通史を描ききった点のみをとっても、本論文は、日本語で書かれた音楽研究として類例を見ない成果であったと言える。問題意識の点でも伝統的な資料批判と、より新しい文化研究的視点を折衷したうえで、ガウチョを通してアルゼンチンの国家イメージを描く、という問題設定の軸をばやけさせなかった筆力は評価に値する。2009年1月26日に行われた公開口頭試問では、主査が上記のような評価を述べた後に、質疑応答に移った。ここで一番問題とされたのは、舞台上のガウチョとは区別される、現実のガウチョの問題である。この実体としてのガウチョについて、もう少し具体的な記述があれば、イメージとしてのガウチ

ョの論述にも説得力が増したのではないか、という指摘があった。また、終章でのユダヤ系移民の話は唐突であり、全体の締めくくりとしては、無理があるとも思われる。さらに、概念や表記の上での細かい誤りもいくつか指摘された。しかし、著者はこれらの指摘に率直に応え、審査員一同この論文が日本の音楽学研究、アルゼンチン研究に対して持つユニークな意義を有していることを確認した。以上により、本論文を、博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。